

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

意気高く槍の穂先に立つ その1

前号で全校登山がどのように準備され、実行されているかを紹介した。実際の登山はどうだったのかを報告する。22日快晴の空の下、4時20分に自宅を出て学校に向かう。5時にOBのまとめ役のNさん、Fさんの同席の下、登山委員会として実施を最終的に決定。小生は槍ヶ岳隊長である。5時35分に校長の車で集合場所の信濃大町駅に向かう。生徒リーダーのO君が、「町高最後を飾るべく、みんなで槍の頂上に立ってきます。行ってきます。」と留守部隊に挨拶して、出発。

中房温泉に着いたのは、7時10分、準備をしていると穂高東中学校の燕隊が登って来た。北アルプスも夏山シーズン真っ盛りなのだ。東中の先頭に行く穂高町のガイドのOさんから「大勢いるから先行って」と言われ、まずは第1ベンチまで先行すればよからうと出発する。

今年の槍ヶ岳隊は、男子18名、女子2名、OB2名、引率職員2名の24名。かつては2泊3日コースは他にもあったが、8つある登山コースの中で、今も2泊3日で行うのは、この槍ヶ岳のみだ。さらに槍ヶ岳隊だけは「1年生は参加できない。女子は必ず運動部に所属していること。」という縛りもある。加えて事前に一回人工壁でのトレーニングも行っている。「槍ヶ岳に登りたくて大町高校に来た」、「代々部活の先輩が登って来たから私も」、「自分への挑戦として」「燕から見た姿が最高だったから」などそれぞれの動機は様々だが、ここを希望してくる生徒たちは、志も高い。

もう何年もこのコースを担当しているOBのHさんを先頭に2名的女子が続く。男子は4班にわけて休憩のたびにローテーションさせて合戦尾根をじわじわと登って行く。第1ベンチ、第3ベンチで休憩をし、合戦小屋には10:00に着いた。無線で学校と連絡をとると、すべての隊が予定通り出発したとのこと。ただし、天気は下り坂である。出発時はあんなに青空が広がっていたのだが、合戦尾根を稜線に登り上げたところから上空には雲が広がってきた。11:05、燕山荘着。槍こそ望めないもの2800mくらいまでは何とか見える。昼食をとって、後発隊の燕隊に状況を伝えて、大天井に向けて出発。砂礫帯ではコマクサが真っ盛り。蛙岩を過ぎて、大下りに入る手前で一本取っていると、ポツリポツリと雨が降りだした。やむなくカップを着させる。

1951年(昭和26年)というから、全校登山が始まってまだ程無い第4回のことだ。槍ヶ岳隊のメンバーの一人である2年生のHさんが、為右衛門吊り岩のあたりで滑落して死亡するという事故があったそうである。全校登山の安全性に議論が集まる中、生徒からは学校の名誉回復や「経済的に登山ができる」などの理由で継続を求める声上がり、当時の校長の「全校登山をやめたら、大町南高(编者注:当時の校名)の生命がなくなる」との考えもあり、翌年以降も続いた。事故を機に、



山岳部OBらが登山隊に加わり、生徒の安全を確保する体制も築かれてきた。以来、槍ヶ岳隊は為右衛門吊り岩でHさんに黙祷をささげ、安全登山への思いを新たにしてこの場所を通過しているという。ご存知の方もいるだろうか、夏道と冬道の合流する手前の岩壁には1958年につけられたプレートがその記憶を今に伝えている。(写真参照)このころから雨は本降りになり、大天荘につくころには、土砂降りとなった。しかし、大天荘から頂上は指呼の間、明日の槍も登れるかわからないので登っておこうと、そのまま大天の頂上に登ることにした。登ると決めたとたん雨は一層激しくなったが、すでに



小屋に到着したこともあって、生徒たちは怯むこともない。頂上まで駆け上がり、恒例の山岳部歌(編者注:この歌はこれまで山岳部の山行の際にも歌い継いでいることを紹介して来たが、単に「山岳部の歌」というにとどまらない。大町高校のいわば第1応援歌として、全校生徒が歌える歌である。したがって壮行会は言うに及ばず、全校登山でも必ず歌われる)を謳い上げた。生徒たちの気持ちが勝ったのだろうか、景色こそ見えなかったが、山頂ではあれほど

降っていた雨が止んだ。

しかし、雨はその後も降り続き、夜半にはだいぶ風も強く山小屋にいてもそれと知れるほどであった。翌朝、一番に常念隊の隊長からどうしたらよいかという電話が入る。常念はこちらに向かってくるので、その情報が欲しいというわけだ。また、燕隊も無線でこちらを呼んでいる。我々はどうするか、本部からは、こちらの判断を優先するということであった。気圧配置から言えば、明日は回復が見込めるのではないかということ、思いのほか風がないことなどから、我々はとりあえず西岳まで進むこととして本部に伝えた。ちなみに他の隊の動向はといえば、予定通りの行動が最も安全である蝶隊、燕隊以外は、小蓮華隊が小蓮華登山を中止して下山、五龍隊、常念隊も縦走は中止し、往路引き返し、鹿島槍隊は第1目標の鹿島槍の登頂は断念、宿の関係で一日遅れで出発するはずだった唐松隊が中止ということになってしまった。(それぞれのコースは前号を参照されたい。)

そんな中、我が槍ヶ岳隊は意気軒昂。朝食時、「槍に行くぞ!」と伝えたが、もちろん、生徒たちに異論があろうはずはない。・・・雨の中、6時に小屋の前で、陸上部の女子Nの音頭でラジオ体操!支配人の榊さんに見送られて出発。(以下次号につづく)

編集子のひとごと

今年の山は雪どけが早い分、花が早くしかも美しい。今回の全校登山は全く天候には恵まれなかったが、雨の中で、そんな可憐な花々に心を洗われた。そして幸いにも事故はなかった。今日は8月1日、1967年のこの日、僕の母校でもある松本深志高校は、学校登山中、西穂独標付近で落雷に遭い、11名の尊い命が失われた。高校が自宅から至近だったこともあり、まだ小学校2年生だった僕の記憶にもこのことは、ありありと刻み付けられている。あの日も暑い日だった。あれからもう、48年がたつ。(大西 記)